

女優デビュー

「研究生という名目で門もステージもフリーパスにするので遊びに来てください」松竹の大船撮影所の高村潔所長に言われたのは撮影所を見学して間もないことだっ

書屋履歴私

こ 子
は い 恵
ま し 岸

⑧

た。学校の授業やバレエ、茶道、華道の稽古などに忙しかったが、私は同級生の田中敦子さんと映画撮影というものをたまに見に行った。

高3の春休み、私たちは後に監督になる野村芳太郎さんに請われて教育映画「アメリカ博覧会の日」に女学生役

で出演した。その体験に強い刺激を受けた私は「梯子段」という短編小説を書いた。

作家はじっと見ていらした。（物書きはああいいう目をしていなければダメなんだ）料亭を出て歩く私の脚に桜茶でびしょびしょにぬれたスカートがまとわりついた。

「この時は川端康成先生のまな弟子で、雑誌『ひまわり』の編集局長をしていた。私の小説を読んだ若槻さんが「恵子ちゃんは女優よりも

高校の卒業試験が終わった時、松竹から映画「我が家は楽しい」に女学生役で出演してほしいと申し出があった。入試も気になったが、映画

「大変な世界」ほぞをかむ

女学生の役、現場で笑われ

作家になったほうがいい」と言い出し、川端先生の定宿だった東京・四谷の料亭旅館、福田家に私を連れて行った。

私は身分違いの雰囲気におのき、湖のように深い大作家の目に見つめられて手から桜茶を落とした。畳にこぼれた桜茶をワンピースで拭きながら、自分のつたない小説を座布団の下に滑り込ませて恥じ入っていた。そんな私を大

というものも体験してみたかった。「これ1本だけ」と両親に頼んで出た映画がヒットし、私は主役、准主役など多くの映画に出て、結局は女優街道を走る身となった。

初めて体験した撮影現場で「大変な世界に入ってしまった」と私はほぞをかんだ。

カメラマンが私の顔を見ながら「ちよっとわらってみよるか」と言う。「なぜ笑うん

す」と答えると、「あんたの顎じゃないよ。お二階さんのライトの顎だよ」と言っ

（主語をはっきり言えよ）私は心の中でつぶやいた。ライティング待ちの間、寒かったので真っ赤に燃えるド



高峰秀子さんと共演した「我が家は楽しい」（1951年、中村登監督）—松竹提供

もない毎日を私たちは結構面白がって過ごした。

煤けた畳の大部屋の隅っこに岸恵子、小園蓉子という2つの名札がかけられた。ちよつちよつかな名札は風が吹くとぶつかり合っ

で読んでいいのは脚本だけよ」「ごめんなさい」と謝りながら私は「怖い」と思った。

秀子さん恐怖症になった。

私と敦子さんは相変わらず研究生という身分だったので主役を務めながら、その他大勢や通行人としても出演した。眠る間

（女優）